女性の自伝的作品と読者
―『蜻蛉日記』と「金石録後序」を中心に―

施　　旻*

1．はじめに

平安時代には女性の書いた文学作品が数多く存在する。その中後期から「女流日記文学」と称せられる作品群は存在し、それらはいずれも作者が人生のある時点で過去の生涯を振返って書き記したものである。とり扱われた年代や時期、作者の立場がそれぞれ違うけれども、自らの体験を回想によって連続の相において捉えようとすることはどの作品でも共通している。その嚆矢とされる『蜻蛉日記』は、作者道綱母が自らの二十一年間の結婚生活を回顧し、夫兼家に対する執着、それが受け入れられないため生じた不安、不満などの感情を綿々と書き続け、人々に示して見せようという意図を明らかに表していることから、世界中でも自伝的作品の早い例として注目されている。

これに対して、中国の十三世紀（宋代の終わり＝1279）までの著作に関わる女性を探ってみると、詩に優れた女性、女訓書を著す女性などの存在は知られるものの、その作品の大部分は散逸し、女性作家は見過ごされてもおかしくないほどにごく小さな一角しか占めていないのが現実である。本稿は中国でのそうした文学状況を概観した上で、宋の著名な女詞人李清照の「『金石録』後序」という自叙的散文作品を取り上げ、『蜻蛉日記』との比較を試みる。両作品の外的状況の大きな相違と、それにもかかわらず追憶を表現する方法の共通性が見られることを明らかにし、想定されている読者の問題も含め、女性の自伝的作品の特質について考察してみたい。

＊お茶の水女子大学大学院院生

2．宋までの女性の著作について

平安時代の終わった1192年からほぼ一世紀後、中国の南宋王朝が元に滅ぼされ幕を下ろした。それまでの女性の著作で今日に残っていることが確認できるものを以下の表に掲げてみる。

年代	人名	主な著作名
後漢	班昭	女誡 a
晋	衛鑠	筆陣圖 c
	蘇蕙	織錦迴文詩 b
唐	吳彩鸞	唐韻 c
	李冶	李季蘭集 b
	宋若莘　宋若昭	女論語 a
	武皇后	臣軌（臣範）c
	胡愔	黄庭内景圖 c
	魚玄機	魚玄機集 b
	鄭氏	女孝經 a
	薛濤	薛濤詩 b
後蜀	花蕊夫人費氏	花蕊夫人宮詞 b
宋	朱淑真	朱淑真斷腸詩前集後集 b
	李清照	漱玉詞 b
	張玉孃	蘭雪集 b
	楊太后	楊太后宮詞 b

上記の表は胡文楷氏の『歴代婦女著作考』[1]によりまとめたものである。同書は正史・地方史・蔵書目録題跋・詩文総集類などの資料に基づき、漢から清まで四千人余の女性著述家及びその作品の所蔵状況を収録する大著である。この四千人の内訳を時代別で見てみると、宋までのおよそ一千五百年間の間に存在した女流著述家の数は

九十六人であり、かつ上記の表で示されるように著作自体が今日まで残っているのはこのうちわずか十七人である。今回は表に挙がったその十七人を考察の対象とする（他は詩や文章が一部残存するものの、著作そのものが散逸しているため除外）が、この十七人の作品は書名でも分かるように、a女訓書類、b詩集や詞集、c書道・医学などに関連するもの、という三種類に分けられる。文学的作品と見なしえるのはbの詩（詞）集のみで、散文作品の欠如が明らかである。その点において平安時代の女性文学と大きく異なっていることは言うまでもない。平安女性は自撰や他撰の和歌の集（いわゆる「私家集」）を有しているほか、物語、日記、随筆のような散文作品の創作を盛んに行っていたのである。

ここに挙がった中でも最も年代の早い時代の女性著述家である後漢の班昭は『漢書』を著した班固の妹で、和帝の鄧皇后をはじめとする宮廷女性に経学・天文などの学問を授けていた人物である。彼女の文集『班昭集』は『隋書・経籍志』等にその書名が記されているものの、早くに散逸したらしい。一方、儒教の理想の従順な女性像を示す、美徳総則として女たちを戒めるために作られた『女誡』は『後漢書・列女伝』に全文そのまま収められ、代々読み継がれており、女訓書の典範となっている。また、班昭は『漢書』の八表や天文志の部分を補完する事業やその書の句読を伝授することにも携わっていたと言われている[2]。彼女の例から、男性本位の儒教社会においては、女性の手により書かれた作品は文学的なものより実用的、あるいは男性を補佐すべく著されたものが後世に受け継がれやすいと推察される。そして、男性と同じように経学や史書等の知識を習得し、同じく漢字を用いて創作に携わる女性が作品を広めるためには、優れた才学は勿論のこと、特殊な社会的地位にあることが不可欠であっただろう。上記の表中の女性作者は皇后、女道士や妓女のような特別な身分の人たち以外では、ほとんどが実家や夫の家の格が高い女性である。この点に関して、後述するように平安時代の女性作家の状況との違いが見られる。

3．中国の自伝的文学について

残された女性の著述が少ない中、過去の生活を振り返って自らの人生を記述する女の自伝的作品の存在は注目に値するものといえよう。そのことを検討する前に中国古代の自伝文学の全体像を概観しておきたい。「自伝」という中国語は800年前後、中唐の時期に見えはじめたが、通常は「自叙」や「自序」、あるいは「自述」などという言葉が用いられていた。川合康三氏は漢から唐までの自伝的な作品を網羅し、西欧の自伝と比べながら、中国の自伝には「自分を人間の類型の中で捉えようとする傾向が強い。そしてまた自己省察より自己弁護というに近く、中国の自伝が自分を語るのは自分の正しさを主張するためのもの」だと指摘している[3]。

同氏の研究によれば、自伝的作品は次のように分類されている。①書物の序に見える自伝（司馬遷『史記』の「太史公自序」等）、②陶淵明「五柳先生伝」型自伝、③自撰墓誌銘、④詩の中の自伝、⑤自己認識表出の自伝（陸羽「陸文学自伝」）。川合氏の書に挙げられている作品は全体的に数が多くなく、詩や墓誌銘を含めても二十篇ほどしかない。唐末までの長い文学史の中で自伝の占める位置が僅少であったことがわかる。そしてすべての作品がさほど長くない。司馬遷の「太史公自序」においても自伝的な部分は全体の五分の一にも満たず、劉禹錫の「子劉子自伝」も大体千字と短い。さらに留意すべきは、唐末まで女性の書いた自伝的なものが殆ど見られないということである[4]。このことは、繰り返しになるが、自伝作品に限らず、見てきたように古典作品の全般の傾向とも言える。中国の古典文芸の世界は男性が主導的で、ことに士大夫という知識人層によって担われてき

たからである。

４．李清照の「『金石録』後序」

こうした状況の下で唐に次ぐ宋の時代に女性の自伝的散文作品がかろうじて一篇残っている。それは11世紀末から12世紀に生きた李清照の「『金石録』後序」というものである。李清照は号が易安居士、詩・文をよくし、特に詞に優れ、『宋史・芸文志』に「易安居士文集七巻、又易安詞六巻」と記載されたように多くの作品を残したが、現在は断簡を含めて100篇前後のものが伝えられている[5]。彼女の父李格非には代表作「洛陽名園記」があり、経学の研究をはじめ、文や詩の創作で名高い学者である。李清照は十八歳の時、のち宰相の位についた趙挺之の息子趙明誠と結婚した。

趙明誠は地方の長官を歴任し、金石学に励む文人としても有名である。彼は五代までの古銅器の銘文、石刻文を収集し、その目録及び関連する考証を『金石録』という本にまとめ、高い評価を受けている。ただし、その書は趙明誠の生前に完成されておらず、李清照の添削校勘を経て、彼の亡くなった二十年後に初めて朝廷に献ぜられたようである。「『金石録』後序」(以下「後序」と略す)はその『金石録』の跋文にあたるものである。「後序」の執筆時期については、従来より多くの議論があるが、現在では紹興四年(1134)説が有力視されている。李清照は「後序」に金石資料の収集と散逸の過程を述べると同時に、自らの半生を回想し、結婚当初からの夫婦の日常的生活、夫の病死、戦乱のため南方で避難した時に遭遇した種々の苦難を時間の順に沿って書いている。千九百字程からなるこの文章では、『金石録』という書物自体に言及するのが冒頭と末尾の両箇所のみで、全体の十分の一の量にすぎない。本来後序としてはその書の内容や執筆経緯などを述べるのが主眼であるべきが、彼女は夫の著書の跋文の形を借り、書の紹介より何倍もの文面を費やし、自らの体験と感情を語っているのである。それがどのようなことを意味しているのかについて検討してみたい。

彼女は自分のことを次のように書き出した。

> 余建中辛巳，始歸趙氏。時先君作禮部員外郎，丞相時作吏部侍郎。侯年二十一，在太學作學生。趙李族寒，素貧儉。每朔望謁告出，質衣，取半千錢，步入相國寺，市碑文果實。歸，相對展玩咀嚼，自謂葛天氏之民也。[6]

と、結婚の年、その時の父と舅の官位、夫の年齢・太学生の身分などを言い、新婚生活が質素でありながら二人が同じ趣味をもつため快適だったと記している。書物の序に作者が自らの出自や経歴を叙述するという中国の自伝の形式[7]が司馬遷の「太史公自序」から既に存在していたので、李清照は勿論それを知っているはずである。また、ここの「葛天氏之民」という文は「葛天氏(無為治世で称賛される太古の伝説上の王)の頃に満ち足りた暮らしをしていた民」の意で、陶淵明の自伝「五柳先生伝」にある「酣觴賦詩，以樂其志。無懷氏之民歟。葛天氏之民歟。」の一節を踏まえる表現である。語句の引用にとどまらず、李清照は「五柳先生伝」全篇の理念に共感しながら、趙明誠との結婚生活を振り返って書いているのではないかという指摘がある[8]。

こうして既存の典型的自叙伝の体裁や趣旨を想起させ、「後序」の読者に対して、ここで述べるのがほかならぬ自分自身のことであるという彼女の執筆意図がうかがわれる。想定されている読者はいうまでもなく『金石録』を享受する人たちと同じで、士大夫階層を主流とする男性知識人なのであろう。実際にこの「後序」について、現存の文献上での最も早い言及は李清照とほぼ同時代の学者洪邁の筆記『容齋四筆』にまで遡って見られる[9]。彼は「趙徳甫『金石録』」(巻五)の項に当該本の内容を簡潔に紹介したあと、「其妻易安李居

士，平生與之同志」とし、「後序」をほぼ全文抄写し、最後に「時紹興四年也，易安年五十二矣。自叙如此。予讀其文而悲之，爲識於是書」と述べている。洪邁の関心は『金石録』という書物より李清照の自叙文「後序」に向けられていることが明らかである。

続いて、結婚六、七年目以降の二人の生活が次のように書かれている。

> 毎獲一書，即同共勘校，整集簽題。得書畫彝鼎，亦摩玩舒捲，指摘疵病，夜盡一燭為率。故能紙札精緻，字畫完整，冠諸收書家。余性偶強記，毎飯罷，坐歸來堂烹茶，指堆積書史，言某事在某書某卷第幾葉第幾行，以中否角勝負，為飲茶先後。中即舉杯大笑，至茶傾覆懷中，反不得飲而起。甘心老是鄉矣！故雖處憂患困窮而志不屈。收書既成，歸來堂起書庫大櫥，簿甲乙，置書冊。如要講讀，即請鑰上簿，關出卷帙。或少損汚，必懲責揩完塗改，不復向時之坦夷也。是欲求適意而反取慘慄。余性不耐，始謀食去重肉，衣去重采，首無明珠翡翠之飾，室無涂金刺繡之具。遇書史百家字不刓缺，本不訛謬者，輒市之，儲作副本。自來家傳《周易》、《左氏傳》，故兩家者流，文字最備。於是幾案羅列，枕席枕藉，意會心謀，目往神授，樂在聲色狗馬之上。

ここでは李清照自身が金石資料の収集、書写、整理、保管すべて携わっていたことが書かれ、そのことをめぐる夫婦関係の変化（傍線部、筆者注）、読書や古物書画収集に対する彼女の態度、特に夫以上に才学をもつことが憚りなく示されているのである。夫の趙明誠は自ら記した『金石録』の序の中で、自らの勤勉と努力、当該著書の優れた学術的意義については自讃しているが、妻李清照のこの事業への協力と貢献については一切言及していない。彼女が夫の序に対抗し「後序」を執筆したとまでは言えまいが、ただ李清照の文章が単に夫の業績を称賛し、睦まじい夫婦関係を誇示するために書いたものではないことは見てきた如くである。李清照は男性知識人を相手に、この書が夫婦の共同作業の結晶であること、並びに夫を超えるほどの才学を自らがもつことなどを示すべく、自分の体験や気持ちを述べることを通じて自己主張をしているのではないかと思われる。

5．平安時代の女性文学について

では、平安時代の女性文学の状況はどのようなものであろうか。周知のように、平安初期の九世紀以降、仮名文字（いわゆる「女手」）の普及とともに、それを使いこなした女性たちは和歌、物語、日記など数多くの作品を書いた。中国で男女がずっと同じ漢字体系を用いるのと異なり、平安時代においては、男性は日常的伝達の手段としては仮名も使っていたが原則として公式的には漢字を、女性は普段の生活から文学創作まですべて仮名を用いていた。その表記文字の使い分けは、女性の読むことと書くことに対しての自由度を高めたに違いない。

また摂関政治の発展とともに、天皇の母である皇后をはじめとするキサキとキサキに使える女房たちは重要な存在となった。既に指摘されているように、女房たちが公卿・殿上人など男性貴族との交流を深めたり、或は受領の妻・娘として地方へ下向するなどの社会的経験を積んだことや、手紙や日記を書き、文字を使用することが多くなったことなどが相まって、王朝女流文学の隆盛がもたらされたのである[10]。前述した中国の宋までの女性作家は妓女、女道士などの特殊な身分、または家柄の高い女性が多いことに比して、平安時代の女性文学の主な担い手は受領という地方官の中流貴族の出身であったことも注目される。

さらに今日まで著作の残っている平安女性の数は同時代の世界との比較においても圧倒的に多く、たとえば、十世紀後半から十二世紀前半までわずか二百年の間に、和歌の私家集（自撰・他撰

をとわず)、日記、物語の作者として併せて36人が計上できる[11]。平安時代には読み書きする女性が層をなして存在しており[12]、彼女たちが文学の創作、享受、流布に深く関わっていたからこそ、多くの作品が残されてきたのであろう。

6．道綱母の『蜻蛉日記』

最後に、平安時代の女性日記文学の嚆矢とされる『蜻蛉日記』について、想定される読者の問題を中心に考察していきたい。『蜻蛉日記』の作者道綱母は受領階級の出身で、宮仕えをしたことがなく、一生いわゆる「家の女」であった。彼女は954年に摂関家の三男藤原兼家と結婚し、翌年に道綱を生んだので、道綱母と呼ばれている。『蜻蛉日記』は上・中・下三巻から成り、その記述が二十一年間の年月にわたっている。以下その冒頭にある序文と見なされる部分を挙げる。

> かくありし時過ぎて、世の中にいとものはかなく、とにもかくにもつかで、世に経る人ありけり。かたちとても人にも似ず、心だましひもあるにもあらで、かうものの要にもあらであるも、ことわりと思ひつつ、ただ臥し起き明かし暮らすままに、世の中に多かる古物語の端などを見れば、世に多かるそらごとだにあり、人にもあらぬ身の上まで書き日記して、めづらしきさまにもありなむ、天下の人の品高きや、と問はむためしにもせよかし、とおぼゆるも、過ぎにし年月ごろのこともおぼつかなかりければ、さてもありぬべきことなむ多かりける。[13]

この序の前半では自分がどういう存在なのかを切実に訴えかけ、後半では「この上なく高い身分の人と結婚した」自分の生活の実態[14]を積極的に人に示そうとしている。「かくありし時過ぎて」、「過ぎにし年月ごろのこと」などの表現から作者の回想的姿勢が明らかである。傍線部分は当時の日記文学と物語との関係を考えるときの重要な箇所であり、難解な部分でもあって、先学の意見も分かれているが、すくなくともその姿勢において、「そらごと」の「古物語」との対比の上で、我が「身の上」の「日記」を書こうとしていることは認められよう。それを別の角度から考えてみれば、道綱母の想定していた日記の読者は「物語」の読者層とかなり重なっているはずである。当時多くの物語は貴族階級の女性のために書かれたことが既に指摘されている。道綱母は回想という方法をとり、体験時の実人生のことを取捨選択し、自ら思っていた我が身の「真実」を、自分と似ている境地にいる女性またはそのような生活に関心を持っている貴族女性に語りかけようとするのである。これは士大夫階級の男性知識人を相手に書かれた李清照の「後序」と大いに異なっているところである。

7．おわりに

本稿は、異なる文化的歴史的背景に中日両国の現存最古の女性の書いた自伝的作品を取り上げ、想定された読者の問題を含める両作品の相違点並びにその相違点をもたらした原因について検討してみた。

なお、本来「読者」のことは作者の予想していた読者だけではなく、実際に作品を読んでいた人たちのことも考慮に入れなければならない。『蜻蛉日記』のような作品は世に広まり、男性貴族に読まれたことが文献上でも確認できる。今後はそうした問題を視野に入れつつ、男女の間の文学の隔絶と融合の実態を明らかにしていきたい。

註

1 胡文楷『歴代婦女著作考』増訂版、上海古籍出版社、2008年

2 黄嫣梨『漢代婦女文学五家研究』河南大学出版社、1993年

3 川合康三『中国の自伝文学』創文社、1996年
4 川合氏は前掲著書の「詩の中の自伝」の一節に後漢後期の著名な女知識人蔡琰の「悲憤詩」(二首)を挙げているが、その詩自体の偽作説はともかく、表現として「語り手の感情はあまりにも類型化していて、個としての性格が乏しい」と述べ、「蔡琰という実在の女性、その悲劇的人生を素材として組み立てられた物語詩」とし、その自伝性を否定している。
5 王仲聞『李清照集校注』北京人民文学出版社、1979年による。
6 テキストの引用は前注5による。
7 同前注3
8 宇文所安『追憶：中國古典文學中的往事再現』(Stephen Owen "Remembrances：The Experience of Past in Classical Chinese Literature") 鄭學勤訳 生活・讀書・新知三聯書店、2005年
9 褚斌傑ら編『李清照資料彙編』中華書局、1984年
10 古瀬奈津子『摂関政治』(岩波新書、シリーズ日本古代史⑥)岩波書店、2011年
11 『私家集大成』中古Ⅰ、Ⅱに収載されている女性作者の数による。福田智子『平安中期私家集論』勉誠出版社、2007年も参照。
12 平野由紀子「平安文学と女性—層をなす書き手」『青い宝石』所収、青簡社、2010年
13 テキストは新版『蜻蛉日記』(川村裕子訳注、角川ソフィア文庫、2003年)による。
14 本文「天下の人の品高きや、と問はむためしにもせよかし」の解釈については、諸論があるが、ここでは通説に従う。

参考文献

陳祖美『李清照作品賞析集』巴蜀書社、1992年
鉄愛花『宋代士人階層女性研究』人民出版社、2011年
向梅林『超越與陷落－李清照的歴史審理與現代解讀』湖南文藝出版社 、2005年
中野幸一「日記文学—読者意識と享受層—」『文学・語学』52、1969年6月
松尾肇子「李清照像の変遷—二度の結婚をめぐって—」『女性史学』13、2003年